

## 朝倉ゼミナールで学ぶ子どもたちとその後

森 尚水(朝倉ゼミナール)

### はじめに

この1年間、ゼミに参加していた子どもに言いようのない悲劇が起こった。1件は、高校を卒業した施設の子どもが病院で自殺をしたのである。退園した後、元気に働いていたのだが、体をこわし、入退院を繰り返す中でのことであった。4月にわかってから、近くの身よりにそのことが伝わってくるまでに、実に2ヶ月もかかったのである。父も母もいないなかで、淋しく亡くなっていったのである。もう1件は、高校卒業後愛知へ就職していったが、足に病気があり、数ヶ月で工場をやめ高知へ帰ってきた。この子も親がいず、ホソボソとコンビニにつとめていたが、1ヶ月と少したって突然姿を消した。私たちはひょっとして・・・と頭によぎりその姿をさがしたが、わからなかった。この2人とも親の存在がなく、施設を出てから精神的にも肉体的にも追いつめられていたのである。

25年以上前に、施設の方から「この子どもたちを高校に行けるようにしてほしい」と依頼され、それから20年、100%希望する全日制に合格してきた。これもおそらく日本の施設ではここだけだろう。しかし、高校は卒業したものの、親がいなくて健康を害した子どもたちへの厳しいまでの貧困は、多くの絶望を生みだしていくのである。

### 子どもの実態

ゼミは今年度、中学2年生1名、中学3年生9名の計10名である。そのうち施設の子どもは7名。7名のうち女の子4名が不登校(1人だけ3年生になって学校に通いだした)、10名中9名はひとり親、もしくは身よりのない子どもである。どの子どもも貧困という言葉だけでは言い表せない現実の中にいる。ゼミに来ていた、来ている子どもに少しふれておく。

- ・幼い時、母と父が離婚。父に引き取られるが、その父が自殺。親戚もかまってくれず、おじいちゃんのもとで野放し状態で過ごす。
- ・外国人の母と結婚。そして離婚。父に引き取られるが、父が仕事のため施設へ。成績もほとんど「2」。
- ・幼い時から親に、たばこをおしつけられるなどの虐待を受ける。県内のいくつかの施設を転々と。その女の子がゼミでぼつりと「泣かれんも、泣いたらもっとされるき」つぶやく。
- ・父親が犯罪をおかし、そのことで母親が蒸発。
- ・冬休みのこと。「先生、お母さんの名前がやっとわかった。〇〇やと。それって、さびしいでねえ。」と学習中につぶやく。全く身よりのない子ども。
- ・学習障害(算数・数学など)、重度のてんかんを持っている子ども。
- ・アレルギーが体全体にあり、特に顔もひどく、まゆ毛も白っぽく、そのため人との交わりが十分にできず不登校。
- ・極端に成績が低い(ほとんど「1」か「2」)。ゼミに来ている子どもの過半数以上。中学3年生で1-3ができなく、漢字が全く読めない。特に教科で言えば、国語・英語が厳しい。
- ・中学生になって、中国から日本へ来た子ども。
- ・非行を繰り返し、居場所がない子ども。
- ・特別支援学級にいた子ども。学校から養護学校に行くように言われた子ども。

- ・養護学校に行くには少し能力が高いが、学力が極端に低い子ども。
- ・中学校は私立中学校に通っていたが、クラブなど友人関係がうまくいかなく急に公立高校へ変わろうとする子ども。
- ・他の塾から追い出されてきた子ども。

あげればきりが無い。ゼミに来ている子どもの中には、精神的に追いつめられている子どもも少なくない。たとえば、ある女生徒。「ちょっと手が痛い」といい病院へ行くが、そう大きなケガでもないのに、それから10ヶ月あまり右手を使わず利き手でない左手で書き続けた。今も、これからの自分に不安がいっぱいなのだ。また、アル中の親や兄弟に障害を持った子どももいる。

ゼミに来る子どもは、様々な困難を持っている。ゼミでは、親や地域の人たちの運動で会館を作った時、親たちが規約を作った。その中に“緊急性のある子どもは優先的に入れるようにする”という一項目がある。

### 施設の子どもを受け入れる

25年くらい前に教育懇談会が開かれ、その会が終わった時、施設の職員の方から、「うちの子どもたちを高校に行けるようにゼミに入れてください。高校に行けなかったら、中学校卒業で施設を出ていかないかんので。せめてあと3年間(高校3年間)施設におれたら、子どもも、もう少ししっかりすることができると思うので。」

という話があった。私は、職員の方々の願いを受けとめ、それから25年近く、施設に教えに行ったり、子どもにゼミに通って来てもらっている。

高校進学率は、施設の子どもはほぼ100%。みんな全日制の高校。定時制ではなく全日制であるのは、働きながら定時制を卒業することの方がはるかに難しいからである。希望校への進学、これを柱にしている。あくまで本人の希望通り。25年前に引き受けた時には、この願いに十二分に応える自信はなかった。特に「オール1」や「2」に近い子どもや、内申書の極めて厳しい子どもを全日制高校に入れるようにするには、長時間学習、ドリル、詰め込み学習を批判する民主的教員(私もそのひとりかな)が主張するような学習には必ずしもならなかった。ABCも書けず、漢字も読めず、11-3すらわからない子どもを、10ヶ月足らずで全日制高校に入れるようにするのは容易ではない。

ある年、施設の中学3年に女の子がいた。そのため、ゼミは多くのとき夜開いているので、自転車で1時間以上もかかるゼミに誰も通わせないということがあった。その年の受験結果は惨たんたるものだったという。ある男の子が、

「おれらあ、ゼミに行けざったき、高校も通らなかつた。」

と職員に言ったという。それ以降、女子がいても車に乗せ(送迎の車を施設から出している)、みんなで来ることができるようになった。土曜日や日曜日、あるいは長期間の休みの間は、往復2時間以上かけて自転車で通ってくる。その中には不登校や授業さぼりの子どももいる。ほとんどの子どもは高校へ行きたいのである。施設の子どもの中に、

「あたし、高校行けざったらどうしよう。」

とぼつりとつぶやくものもいた。ところが中学校では「高校は無理」の一言で切り捨てられる子どもが多い。そのため10時間学習もあったし、それをのりこえ、みんな高校に合格していったのである。

特に気を付けていることは、1つの屋根に住んでいる子どもたち、たとえば5人受験して1人だけ不合格というような状況をつくると、その子どものショックは大変なものである。だから、1人ひとりにあった学習をつくることも重要である(1度、1人だけ落ちたことがあった)。

### 子どもの学力を阻害している大きな課題

30年間中学生と学習し、子どもの学力を阻害するいくつかの大きな課題をつかんだ。それは子どもが2学期に入り、

「先生、2週間で1時間しかまだ数学の授業がないぜ。」

とよく報告がある。学校行事、特に体育の行事が他教科を圧迫するのである。高学力の子どもはこのような状態であっても何とかなるだろうが、低学力の子どもは、何日間も授業がないとほとんど忘れてしまって、学習にならない。毎日少しずつこつこつ学習する習慣を、学校自らが破壊しているのである。教育課程が乱れきっている。しかも中学生の学力を総合的におさえようとしている学校、教職員があまりに少ないということである。

“学力は日常性の積み重ね”なのだ。

中間テスト、期末テストの1週間前にテスト範囲を発表する仕方にも疑問がある。そこには「社会教科書P50～80、ワークブックP20～30、プリントの3、4、5、・・・」というように見事に書かれている。しかし、特にプリント類については、試験1週間前に担当教員が子どもに確実に渡すことはまずない。私の知っている限り、高知市ではゼロである。

「数学のプリント、まだくれんが」

「うん、あさって配る」

ひどい時には、あるクラスで、明日試験がはじまるという時に、

「これ、やっちよきや」

と前日にプリントが配られることがあった。しかも難しいプリントである。もともと数学の苦手な子どもはもう手も足も出ない。つまり、試験の予定範囲まで終わらなかったのである。その時は、1学年で2人の教員が担当していて、片方は若い臨時教員であった。そのうえ、前日配られたプリントから多く出ていた。結果は明白であった。2人の教員が教えたクラスで想像できないような点差がついたのである。私は、

「これ、先生に抗議せないかんがやない！」

と言ったほどである。しかし、こういうことが問題にならない学校体質がある。

また、今はないが、2学期制をとっていた学校がいくつかあった。その学校の子どもで、あるクラブ(部活動)をしていた子どもは、クラブの試合が他校と日程がうまく合わず、試験中でも朝練習はするし、試験前日に試合があり、学習そっこのけでクラブの練習をすることも起こっていた。

このクラブ問題は極めて重要である。そこでは子どもの学習権が見えていない教員が多くいる。クラブ担当教員にしてみれば、少しでも試合に勝つようにと練習時間を多く取る。クラブは集団的な要素が非常に強いので、自分1人が休むということができない。まして、今のいじめ社会ではこれを乗り越えることは難しい。

教員が1人ひとりの状態をよく把握し、その子どもにふさわしいクラブ生活を一緒に考えていかなければならない。それが教育である。あるクラブが強くなれば、一部の親たちはそれに従う。親だけではない。学校の教員、管理職さえ、口をにごして何も言わない。そしてクラブ専門教員を作ってしまう。

私も小・中・高・大学とどちらかというクラブ人間であった。しかし、教員が長時間押しつけるクラブではなかった。それでも中学・高校では県下一になったことが何回かある。私は教員になって、たまたま転勤した小学校が、中学校のような体育クラブ活動をしていたので、そのクラブを受け継ぐことになった。毎日練習をしたが、夏休みなど県代表になったときは、朝8時30分から9時半まで全員図書室で学習、そのあと1時間半練習、汗びっしょりになるので終わると水泳、全国大会が終わるまで半月間、ほぼ毎日したものである。それでも、第1回中国・四国の卓球大会では優勝した。

私は、特に小学校・中学校ではバランスよく子どもを育てることが大切だと思っている。クラブといえども、子どもの自主的な活動を重要視することが必要である。高校に入ると、自分自身が選択し、自分の道を見つけることができる。

ある年のこと、ゼミ参加者の8割が施設の子どもたちであった。その1つの施設の男子が吹奏楽部に所属していた。まじめな子どもだが、決して学力は高くなかった。毎日のように夏休みは学力保障のため、多くの学習時間を費やしていた。この子どもも高校受験のために、かなり学習しなければいけなかった。しかし、ほぼ40日間朝から夕方まで練習に追われていて、全くといっていいほど学習時間が取れない。コンクールが終わっても、次から次へとクラブの行事があり、結局1年中、最後の夏もクラブで終わった。吹奏楽部は天候に関係なく、また、夜でも室内での練習ができるので、したい放題である。学校の体制は、子どものこのような生活に口を出さない。

これでは、厳しく言えば、クラブ活動という名を使った「虐待」である。1人の子どもに良くて、それが全ての子どもに通じるものではない。

また、ある男子は、ソフトボール部のエースピッチャーであった。決して、学力、生活態度が良いわけではなかった。その男の子の話によれば、監督が「私立高校をよく知っているのだから、クラブ活動を続けられれば、そこへ入れるようにする」と言ってくれたという。3年のクラブ活動が終わり、子どもは荒れた。受験2ヶ月前には、1ヶ月間も児童相談所に入れられることになり、ますます荒れた。児童相談所から出てきた時も、「勉強がぜんぜんできんかった」と私に報告した。その結果、どうなったか。

合格すると言われていた私立高校も不合格。第1志望の公立高校も不合格となった。受験時の点数では、その高校では高得点であった。しかし、内申書で落とされたのである。こういう話はいくらでもある。ゼミへの相談電話でも、「高校を全て落ちた。クラブの先生はクラブをしっかりとすれば高校へ行ける、言うたのに……。どうしたらいいだろう。」という悩みの相談が多い。

ゼミを始めたころは、クラブ活動をしている子どもは、県(市)体が終わった時、学習(受験)へ生活をきっぱり変えることができている。今はどうだろうか。10月になっても11月になっても、ズルズルとクラブをさせている。そして、学校も一部のクラブについては口出しもできない。

私は本来クラブは社会教育すべきだと思っている。

一歩譲ったとしても、県体が終わった時点で代表にならない限り、3年生はクラブ活動を卒業すべきである。そして、希望する子どもだけ、受験間近まで1日1時間くらい練習することができるようにすればいい。

真に子どもたちに学力保障をし、心も体もたくましく豊かにするためには、いたずらにテストの回数を増やしたり、ある管理職が「成果が上がる方法は、過去5年間の問題をさせること」というような、薄っぺらで専門的の力量のない言葉にあおられたりすることなく、子どもと共に歩み、喜び、そして学習活動をしっかりと記録し、子どもの今と未来への希望を作り出していかなくてはならない。

それが教師の仕事だ。

## 門出してから

毎年3月、高校を卒業し、就職するために長くいた施設を出発するときの“門出の式”に参加させてもらっている。

ここからが、また多くの子どもにとって“いばらの道”である。

まず、病気をしても落ち着く場所がない。ここ何年か名古屋方面に就職するが、うまくいかず高知へ1度帰ってくることも多い。そこから、行方不明になる子どもや、ずっとうつ病になってしまう子どももいる。そして半数を超す子どもがアルバイト生活に戻る。

就職問題である。

今年は、今までとは違っていた。それは就職のために3人の子どもが自衛隊を受けた(合格2名)。25年間ではじめてである。施設の子どもは、政府からねらいうちにされているのかもしれない。貧困は、戦争への道へと進む。それが政府の政策ではないか。健全な就職先をつくるのがきわめて重要な課題である。

## 付記

私の関わっている施設の高校生の退学は極めて少ない。今までに3～4名である。高校に入り、商業・工業で3年間トップで卒業した子どももいる。ある子どもは工業へ入学し、オール5で卒業。その後トヨタ工業学園に入学。2009年にトヨタ自動車、そして2010年に日本技能五輪大会で優勝、そして2011年10月ロンドンでの技能五輪国際大会「ITネットワークシステム管理部門」で日本初の金賞。また、マラソンの有力な高校で高知県一になった子ども、定時制へ行って1年生で唯一優秀賞を、そして卒業時にはエジソン賞をもらった子どももいる。

森尚水『希望 まめだ先生と朝倉ゼミナール

低学力を克服した奇跡の30年』リーブル出版、2012年発行。

ご注文、問い合わせ等は手紙で

〒780-0992 高知市行川568-1 森尚水

